



Title	配信者オンラインファンコミュニティにおけるアカウント使用と規範：X 上の投稿の談話分析を通じて
Author(s)	岸田, 月穂
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 52-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102265
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

配信者オンラインファンコミュニティにおけるアカウント使用と規範 —X 上の投稿の談話分析を通じて—

岸田 月穂

1. はじめに

2020 年代の現在に至るまで、電子メディア及びインターネットは急速に発達を続けている。1990 年代には、インターネットと移動体通信が融合し、メディアスケープは大きく変容を遂げた（木村, 2018）。2000 年代にはソーシャルメディアが発達し、オンラインコミュニケーションが盛んに行われるようになっている。それと同時に、オンライン上では、絵文字の使用（西村, 2020）、既読スルー（宇宿他, 2019）など対面の場でのコミュニケーションとは異なる言語実践が観察されるようになった。アカウントを使い分ける「複数アカウント使用」もオンライン空間独自の言語実践の 1 つである。複数アカウント使用に関する先行研究では、SNS ユーザーが自身の印象を管理するためにアカウントの使い分けを行っていること、メディアイデオロギーに基づく規範との関係性が明らかになっている。その一方で、アカウント使用とコミュニケーションの規範の関係性については明らかになっていない。

本稿では、SNS 上で歌やゲームなどのコンテンツを投稿する配信者を応援するコミュニティ（以下、対象ファンコミュニティ）に所属するファンが行う「アカウント」に関する投稿に焦点を当て、①ファンが SNS 上のコミュニケーションの場である「アカウント」に対して抱いている認識、②「アカウント使用」に対する規範意識、③規範意識の背景にあるオンラインコミュニケーションの規範を明らかにする。特定のコミュニティにおける規範の事例検討を行うことを通じて、複数アカウント使用という SNS 上の実践についてコミュニケーションの観点から理解することに寄与することを目指す。

2. 先行研究

2.1 オンラインコミュニケーションにおける規範

Ahearn (2021) は、「オンラインコミュニティにおける言語使用、価値観、優先順位は、そのコミュニティが存在する社会の文化的規範によって形作られる」(p.170, 筆者訳) とオンラインコミュニティにおいて規範が果たす役割を指摘している。Herring (2007) は、オンラインコミュニケーションに関する規範を「集団の形成方法に関する公式または非公式な管理上の規約である組織的規範」、「コンピュータを介した文脈に規範的に適用される行動基準を指す社会適切性の規範」、「特定のグループやユーザーに通用する言語的慣習である言語の規範」(Herring, 2007: 21, 筆者訳) に分類している（表 1）。これらの規範は明示的に示される場合もあれば、コミュニティの中で暗黙に共有されている場合もあると指摘している。

表1.オンラインコミュニケーションの規範（Herring, 2007 をもとに筆者作成）

規範	概要・例
組織的規範	新しい構成員の加入方法、公式な役割を果たす人物、メッセージの配信・保存方法、不適切な振る舞いに対する処罰方法
社会適切性の規範	ネットケット、FAQ（よくある質問）
言語の規範	省略語、頭字語、インサイダージョーク、特定の談話ジャンル

対象ファンコミュニティとこれらの規範の関係性について概観する。末岡（2019）は、Twitter上のオンラインコミュニティの特徴として、「自分自身を軸にしたフォロイー・フォロワー関係によって形成される」、「オンラインコミュニティ加入、脱退の手続きを行わない」、「『関心』を軸にオンラインコミュニティを築いている」（末岡,2019:30）ことを挙げている。対象ファンコミュニティは、SNSを起点に広がるコミュニティであり、末岡（2019）が指摘した特徴を持ち合わせている。したがって、各構成員が対象ファンコミュニティでの規範構築に寄与していると言える。また、水沼他（2013）は「Twitter上のマナーや行動規範は個人の自由意思に任せられたゆるやかなルールのようなものである」（p.36）と結論付けた。したがって、対象ファンコミュニティにおいて規範は明示的あるいは暗黙裡に共有される一方で、その遵守に関しては個人の自由意思に委ねられる側面がある。その一方で、規範に逸脱した場合、通報機能等によって構成員が団結して行う処罰も存在し、X上のオンラインコミュニティにおいて組織的規範は構成員個人が担うものとして機能している。

ファンコミュニティにおいても、明示的・暗黙裡に規範が共有されている様子が観察される。長谷川（2004）は、「冬のソナタ」の掲示板のエスノグラフィー調査を通じて、ネタバレ禁止という明示的な規範に加えて、ネタバレに対する相互監視や自主規制を行うべきであるという暗黙の規範が構築されていることを明らかにした。大野（2007）は、ファンコミュニティの本質は構成員間の絆の強さや帰属意識ではなく、「コミュニティにおける他者の行動、そこでの規範、儀式や伝統などを認識した上で、自らの行為を作り上げ、自我を確立していくことである」（p.52）とファンコミュニティにおける規範の理解の重要性を指摘している。本稿で分析対象とする対象ファンコミュニティは、SNSの普及によって登場した現代的なコミュニティであるが、規範の重要性は同様であると予想される。本稿では、対象ファンコミュニティのファンが行うアカウントに関する投稿の背景に存在するオンラインコミュニケーションの規範の様相を明らかにすることを目指す。

2.2 アカウント使用に関する先行研究

若者を中心にSNS上で複数のアカウントを使い分けることが一般化している（「現代用語の基礎知識」編集部, 2021 : 220）。このような状況下で複数アカウント使用に関して、研究が蓄積されている（青山, 2017; 若狭, 2018; 藤田他, 2024）。青山（2017）は、SNSの使い分けに焦点を当てながら大学生のアカウント使用の実態について質問紙調査を行った。その結果、57.9%のXアカウントを所持する大学生が目的に応じて複数のアカウントを使い分けていることが明らかになった。アカウント使用の目的は日常の投稿（77.4%）、趣味の投稿（75.2%）、愚痴の投稿（32.2%）、特定の友達グループでの投稿（27.9%）に大別される。若狭（2018）は、複数のSNSの使用や、同一SNS内でのアカウントの使い分けを「SNSの使い分け」とし、自己呈示の観点からその実態を分

析した。分析の結果、SNS の使い分けは、「SNS に設定されている状況の定義に対応した自己を『適切に』表示し続けるために、それぞれの相互行為の場面を並列して維持する取り組み」(若狭, 2018: 116) であることが示唆された。藤田他 (2024) は、実際に第一著者が X で投稿した内容を分析し、表のアカウントでは、投稿が与える印象を曖昧にするのに対し、裏アカウントでは投稿が与える印象を限定するという印象管理の手法を明らかにした。以上の先行研究から、SNS ユーザーはアカウントの目的・性質に応じて、アカウントが存在する場に適切な自己の側面を表示していることが示唆されている。また、大学生の Instagram ユーザーが行うメインアカウントと「第二のアカウント (finsta)」の使い分けを調査した Ross (2019) は、finsta はメインアカウント使用に存在する「『いいね』を獲得するための、社会的規範や圧力、メディアの物質的制約やアフォーダンスに形作られたルール」(p.359, 筆者訳) から逃れるために行われていることを明らかにした。このことから、アカウントにおける自己表示はメディアイデオロギーが形づくる規範に基づいて行われていることが明らかになった。

これらのアカウント使用に関する研究の特徴として、複数アカウント使用の実践への着目、半構造化インタビューの実施、メディアの特性への着目の 3 つが挙げられる。アカウントの使い分けだけではなく、アカウント使用自体にもコミュニケーションの規範が現れる可能性があるため、本稿では、「アカウント」という場について言及している投稿を取り扱う。若狭 (2018) は、半構造化インタビューについて「『自然主義的観察』とは異なるものであり、そこから得られる知見については仮説の範囲をでることはない」(p.118) と半構造化インタビューの限界に言及している。また、若狭 (2018) は、SNS の利用構造を相互行為的観点から理解するためには、SNS の構造と規範、利用者の実践という 3 つの次元からの検討が必要であり、経験的なデータを用い、規範の視点を組み込んだ包括的な SNS 利用行動の分析が課題であると指摘している。本稿では、SNS 上の投稿の自然主義的観察を通じて、複数アカウントに関するコミュニケーション規範に焦点を当てる。

3. 研究目的と研究設問 (RQ)

先行研究においては、「いいね」獲得など SNS の構造と規範の関係や自己表示に関する研究が蓄積されているが、コミュニケーションの規範との関係性を捉えた研究は管見の限り存在しない。本稿では、アカウント使用の背景に見られるコミュニケーション規範に着目することで、アカウント使用の分析に相互行為の観点を取り入れることを目指す。

本稿では、筆者が調査を行っているオンラインファンコミュニティのファンが行うアカウントに関する投稿に対する談話分析を実施することで、アカウントやその使用方法に対する認識及びその背景にあるコミュニケーション規範を特定する。そのために以下の RQ(研究設問)を設定する。

- RQ1 ファンは、アカウントをどのような場として認識しているか
- RQ2 ファンは、アカウント使用に対してどのような規範意識を抱いているか
- RQ3 ファンが抱くアカウント使用に対する規範意識の背景には、どのようなオンラインコミュニケーションの規範が存在しているか

以上の研究設問の解明を通じて、オンラインコミュニケーションにおいて主要なコミュニケーションの場である「アカウント」と特定のコミュニティの規範の関係性を明らかにす

る。

4. 調査方法・データ概要

筆者は、SNS 上で歌やゲームなどのコンテンツの投稿・配信を生業とする配信者を応援する対象ファンコミュニティに対してエスノグラフィー調査を実施している。筆者は、2.5 次元配信者アイドルグループの 1 つである「すとぷり」を応援するファンであるため、この調査はオートエスノグラフィーの要素を持ち合わせている。筆者は、研究協力者と X（旧 Twitter）上でフォロイー・フォロワー関係になり、SNS 上や対面イベントでの交流を重ねた後に、研究協力を要請した。表 2 は、研究協力者の基礎情報である。

表 2. 研究協力者基礎情報¹

研究協力者	年齢・性別	職業	居住地	ファン歴
A	20 代前半・女	パート	関東地方	5 年
B	10 代後半・女	大学生	関西地方	8 カ月
C	20 代後半・女	会社員	関西地方	5 年
D	10 代後半・女	大学生	関西地方	7 年
E	30 代前半・女	パート	北海道・東北地方	3 年
F	20 代前半・女	ネイリスト	関東地方	7 年
G	10 代前半・男	学生	中部地方	4 年
筆者	20 代前半・女	大学院生	関西地方	5 年

(2025 年 5 月 10 日時点)

研究対象者が自身の X アカウントにおいて 2025 年 4 月 26 日時点までに行った「垢」という語を含む投稿を収集した。「垢」とは SNS のアカウントを表すネットスラングである。現在、「リアルの友人・知人と繋がる本垢」、「友人知人には存在を隠す裏垢」、「ネガティブ投稿が多い病み垢」、

「趣味用の趣味垢」、「恋愛投稿中心の恋垢」の存在が指摘されている（「現代用語の基礎知識」編集部, 2021）。収集した投稿は、62 件（A: 14 件、B: 1 件、C: 30 件、D: 8 件、E: 9 件、F: 1 件、G: 1 件）である（2025 年 4 月 30 日時点）。そのうち、研究協力者が自身のアカウントの性質や使用方法について言及している語り 6 件（A: 4 件、D: 2 件）に対して談話分析を実施する。X 上での投稿を分析対象とすることで、先行研究で課題とされていた SNS 上の投稿の自然主義的観察の一助になると考えられる。また、筆者が当事者の立場から研究協力者の投稿を分析対象とすることで、アカウントの位置づけの把握ができるとともに、客観的にアカウント使用の実態を分析できると考えられる。

5. 分析結果

表 3 は本稿で分析するデータの投稿を行った研究協力者 A、D が X で使用しているアカウント情報である。表 3 において太字で示したアカウントは、研究協力者が応援対象の配信者に関して最も多くの投稿を行っているアカウントであると同時に、筆者との交流が行われているアカウン

トである。本稿で分析する6件の投稿はすべて太字のアカウントで行われたものである。

表3.アカウント情報（抜粋）²

協力者	年齢・性別	ファン活動開始年	ファン活動で使用しているXアカウント
A	20代前半・女	2020年	推し事兼趣味垢・日常垢（非公開） ・ジャニーズ ³ 垢
D	10代後半・女	2018年	推し垢・雑多垢

分析に先立って、研究協力者A、Dのアカウント使用について概観する。Aは、配信者のファンであると同時に、ジャニーズに所属するアーティストのファンでもある。2025年5月7日現在、Aは配信者を応援するアカウント（推し事兼趣味垢）とジャニーズグループを応援するアカウント（ジャニーズ垢）を区別し、さらに自身の日常について投稿するアカウント（日常垢）を作成している。Aは一時期、推し事兼趣味垢でジャニーズに所属するアーティストに関する投稿を行っていたことがある。したがって、Aは、推し事兼趣味垢で複数の応援対象に対するファン活動を行っていた時を経て、現在の応援対象ごとにアカウントを分けるという運用方法に至っている。Dは、応援対象のイラスト（ファンアート）を描く「絵師」であり、Dは配信者グループを応援するアカウント（推し垢）とアニメキャラクターなど様々な応援対象を応援するアカウント（雑多垢）の2つを使い分けている。

5.1 アカウントの使い分け

Aは、推し事兼趣味垢において、アカウントの運用方法を変更することをフォロワーに知らせるA1及びA2の投稿を行った。この投稿は、Aが推し事兼趣味垢において、ジャニーズの応援対象に関する投稿を行うとした時の投稿である。

A1：【ご報告】この度、他界隈の推しもプロフに記載しこちらの垢でも推し事をさせて頂く形にしました。♀もし嫌な方いらっしゃいましたらフォロー外して頂いても構いません。よろしくお願ひ致します

A2：ちなみに湧く時は鍵垢に行きます→リプ、お祝いツイはここでしますよというお知らせでした。♀

Aは、自身のコミュニケーションの場（SNSアカウント）における振る舞いの変更について語っている。Aがアカウントの使い方を規定する背景には、コミュニケーションの場を目的に応じて明確に切り分けなければならないという規範が存在していると考えられる。その一方で、Aは別の応援対象であるジャニーズグループに関する投稿を同じアカウントとするという決断をしている。この決断の背景に存在するAの事情は不明であるが、Aが規範を逸脱し受け手に不快な思いをさせないように配慮を行っていることは明確である。A1の語りは、【ご報告】という表題から始まり、「よろしくお願ひ致します」で締めくくられている。このような報告等を行う際に見られる定型文の採用によって、読み手（他のファン）に丁寧にアカウントの運用方法変更の旨を

伝えている。また、Aは、⏰♀、🔔などの絵文字の使用を通じて、アカウントの運用方法変更について受け手に理解を求めている。その一方で、自分のフォロワーをやめることを認める発言を行い、理解を強制しないという態度を表明している。このA1の投稿に対し、筆者は、「把握だよ」とリプライを送り、Aは筆者がアカウント運用方法の変更を承諾したと判断し「ありがとう」と感謝の意を伝えている。この一連のやり取りは、Aは、アカウント運用方法をめぐる交渉をフォロワーに行い、筆者がそれを受容した過程である。この過程から、対象ファンコミュニティにおける「他の応援対象に関する投稿を同一アカウントで行うべきではない」という規範は、当事者間（フォロワー間）の交渉によって変動し得る緩やかな規範として機能していることが示唆された。

A2は、A1の報告に対する補足である。他の応援対象に「湧く」時は、日常垢（鍵垢）に移動するとアカウントの使い方を定義している。沸く（湧く）とは、「感情が高ぶる、熱狂して騒ぎたてる」（デジタル大辞泉）という意味を持つ。つまり、Aは別の応援対象に対して感情的な自己を見せないことをフォロワーに表明している。この表明から、共通の応援対象に対する関心で繋がっている推し垢のフォロワーに対して、「無関係な自分の感情を吐露する」という過剰な自己呈示を避けることで、適切な距離感を保とうとするAの意識が示唆された。

A3及びA4は、鍵垢についての説明である。

A3：サブ垢のフォロワー内にネッ友さんは一人しかいない笑

A4：サブ垢、完全に日常って感じだけどそれで良ければDMまでどうぞ

A3及びA4において「日常垢」が「サブ垢」と定義されていることから、Aにとって「推し事兼趣味垢」でのファン活動が生活の大きな部分を占めていることが分かる。Aは、日常垢をネッ友（インターネット上で知り合う友達）ではなく、対面での交流をきっかけとした友達とコミュニケーションをとる場として使用している（A3）。また、日常垢は非公開アカウントであることから、Aにとって自分のフォロワーのみに見せたい自己が呈示される場（より私的な場）となっている可能性が高い。Aは、ネッ友が多い「推し事兼趣味垢」において、「日常垢」でフォロワーになる人を募集しており、Aは、自身の私的な側面をネッ友に開示する意思があることが分かる。以上の分析から、Aは応援対象に応じてアカウントを使い分けることに対して意識的である一方で、自身の日常をネットの友達に提示することに対しては比較的緩やかな認識を持っていることをフォロワーに呈示している。

Aの投稿に関する分析から、「応援対象ごとにアカウントを使い分ける意識」、「私的な自己の側面の呈示に対する意識の違い」があることがわかる。前者は対象ファンコミュニティに特有のアカウント使い分けに関する規範であることが示唆された。後者は、ファン同士の関係性構築に関する規範と関与している可能性がある。SNSでは、共通する興味によりつながることができ、会ったこともない人に仲間意識を持つことで、かえって心の内を明かすことができる（井上他,2022）。Aの日常垢で推し垢のフォロワーと繋がる行動は、共通の関心によって繋がる人々に自身の心の内を開示したいというAの欲求の現れである。その一方で、Aは推し垢のフォロワー全員と繋がろうとしているのではなく、AのDMに連絡した人と日常垢のフォロワーになると説明している（A4）。この投稿は、日常垢で繋がる人は、Aとより親しい関係性であるということをフォロワーに伝える投稿として機能していると考えられる。

5.2 推し垢での愚痴の語り方

D は、配信者を応援している推し垢において「愚痴」を話す際の語り方についてフォロワーに提示し（D1）、実際にその語り方を採用している様子（D2）が観察された。

D1：出来るだけこの垢マイナスなこと言いたくないし推しに対する愛だけ呟きたいから、大体あふれた愚痴からの推しへの愛っていう急カーブさせてるけど最近精神終わりすぎときついーでも推しは好きー推しがいるから命は保てるー

D2：すごいこの垢の内容に関係ないこと言うけど最近塾に金がなくて行けないことが判明してでもこのままだとやばいと言われるだけ言われて体験終えたけど苦手な数学をネットで勉強してたらしみほど分かりやすいの見つけた人生なんとかなるぜ精神で生きる～頑張ろ来年度の受験生～

D は、D1において愚痴などの「マイナスなこと」を投稿する時は、最終的に推しへの愛の語りに終着させるという自身の語りの手法についてフォロワーに提示している。D2 は、D1 の投稿の約 1 カ月後に行われた投稿である。投稿の本題に入る前に、「この垢に関係ないことを言う」と前置きを行ってから日常生活での愚痴を語っている。このことから、D はアカウントに関係のない内容を稿することに躊躇があることが示唆されている。また、前半は愚痴/ネガティブな内容（塾にお金がなくて行けない上に現状が好ましくない）であるが、後半はポジティブな物語（ネットで勉強してたら良い教材を見つけ人生なんとかなるという精神になった）に転換され、最後には「がんばろ来年の受験生」と自身と同じ境遇にある来年度の大学受験生にエールを送る形で締めくくられている。愚痴を肯定的な内容（推しへの愛、自身の成功体験など）で締めくくるという語り方の背景には、「ファン活動用のアカウントにおいて自身の暗い側面を提示することは好ましくない」という D の規範意識が現れている。また、若狭（2018）は、愚痴について、オーディエンスの面目を潰す可能性のある話題であるため SNS ユーザーは取り扱わないようによっていると指摘されている。したがって、D がこのような語り方を採用した背景には、「愚痴を投稿することで受け手に不快な思いをさせてはならない」というコミュニケーション規範が存在する可能性がある。D2 において D は愚痴を語っているためこの規範に違反している。規範の違反による受け手の目の侵害を回避するために、ポジティブな物語に転換するという語りの手法を採用していると考えられる。愚痴は受け手の目の侵害に繋がる危険性がある一方で、私的な側面の呈示によって親密性を高め得るものもある。したがって、D のポジティブな物語に帰結させる語りは、愚痴が与える他者の目の侵害を回避すると同時に、フォロワーとの関係性を深める効果を高めるメッセージとして機能する可能性がある。

5.3 分析総括

研究協力者 A と D はいずれもアカウントを使い分けている。A は、ファン活動用のアカウント 2 つと日常を開示するアカウント、D はファン活動用のアカウント 2 つを使い分けている。A と D はどちらも応援対象ごとにアカウントを使い分けている。A は異なる応援対象に対する投稿を同一のアカウントで行うことへの抵抗、D は愚痴や日常生活を投稿することに対して躊躇を抱いている。別の応援対象の話題や日常生活の愚痴などの無関係な情報をコミュニケーションの場

に氾濫させることへの抵抗は、Grice の量の格率 (Grice,1972) への違反への抵抗であると捉えることができる。また、D は、配信者を応援するアカウント内で、愚痴に言及する際に「最後にポジティブな結末でしめくくる」という語り方をフォロワーに呈示するという行為を行っている。これは愚痴によって受け手(フォロワー)の面目をつぶすことに対する配慮であると考えられる。したがって、D の投稿からは相手のフェイスに配慮しなければならないというコミュニケーション規範の存在がうかがえる。特筆すべきなのは、A と D はこれらのコミュニケーション規範を逸脱することを認識しながらも、アカウントの目的とは異なる自己の側面をフォロワーに呈示している、もしくは呈示しようとしている点である。この背景には、ネット上の友達であるフォロワーと親密な関係を築きたいという欲求があると考えられる。その一方で、受け手の面目の侵害に配慮し、フォロワーとの適切な距離感を保とうとする実践も観察された。

6. 考察

本稿では、対象ファンコミュニティに所属するファン 2 名のアカウント使用の語りに現れる規範を考察した。2人は、推し垢において、応援対象に対する投稿だけではなく、自身の日常や私的な側面を呈示している。これは、趣味と日常の投稿によってアカウントが使い分けられるという先行研究の指摘とは異なる実践である。2人は私的な自己の開示を通じて、ファン同士の親密性を高めようとしている可能性がある。したがって、推し垢は、応援対象に対する愛を示す場所であると同時に、ファン同士の繋がりを構築する場所でもあると認識されている (RQ1)。推し垢でアカウントの目的とは異なる日常や他の応援対象に関する投稿を行う時には、受け手への配慮が行われている様子が観察された。A は、異なる応援対象に関する投稿を同一アカウントですることをフォロワーに報告し、D は、愚痴を言う時の語り方を受け手に呈示している。これらの A 及び D のアカウント使用の語りには、「応援対象ごとに 1 つのアカウントを割り当てるべきである」、「ファン活動において自身の暗い側面を提示するべきではない」というアカウント使用に関する規範意識が現れている (RQ2)。これらの規範意識は、関係のない情報を相手に伝えてはいけないという量の格率や相手の面目を侵害してはいけないというコミュニケーションの規範との関連がある。A と D はいずれも、推し垢での発信の時にこれらの規範を意識し、自分がその規範を逸脱する発信を行う時には、フォロワーとの交渉を行っている。その交渉の時には、距離感の近さや愚痴等のネガティブな発信によってフォロワーの面目が侵害されないように配慮している様子が観察された。このことから、「コミュニケーションの規範を逸脱したアカウント使用を行う時には受け手に配慮しなければならない」という規範の存在が示唆された (RQ3)。

7. 結論・今後の課題

本稿では、X 上で趣味用のアカウントの 1 つである「推し垢」を中心にアカウントを使い分ける SNS ユーザーの語りを分析した。対象ファンコミュニティのファンはアカウントの使用目的に応じた自己呈示を意識しており、目的とは異なる投稿を行う時には、受け手にアカウントの目的やコミュニケーション規範逸脱に対する理解の要請や受け手の不快感に対する配慮を行っていることが明らかになった。本稿は、対象ファンコミュニティのファンの投稿の事例検討の一部にとどまっている。今後の研究では、研究協力者の投稿の傾向の分析、アカウント使用に関する語りの分析を蓄積する。それと同時に、対象ファンコミュニティにおける対面の場での参与観察時の語りにも着目し、対象ファンコミュニティにおけるアカウント使用の背景にあるコミュニケーション

ヨン規範を包括的に捉えることを目指す。

参考文献

- 青山征彦(2018).「大学生における SNS 利用の実態——使い分けを中心に」『成城大学社会イノベーション研究』13(1). 1-17.
- 井上史雄・田邊和子(2022).『社会言語学の枠組み』東京：くろしお出版
- 宇宿公紀・加藤尚吾・加藤由樹・千田国広(2019).「LINE のグループトークでスルーをしやすいグループの特徴に関する基礎調査」『日本科学教育学会年会論文集』43号. 652-653.
- 大野貴司(2007).「ファン・コミュニティ：性格と機能」『体育・スポーツ経営学研究』21(1). 47-55.
- 木村忠正(2018).『ハイブリッド・エスノグラフィー NC 研究の質的方法と実践』東京：新曜社.
- 「現代用語の基礎知識」編集部 (2021) .『現代用語の基礎知識 2021 年版 ことばでつながる』東京：自由国民社.
- 末岡真里奈(2019). 繋がりのオンラインエスノグラフィ：吹奏楽部員の Twitter 利用に着目して.
- 西村綾夏(2020).「絵文字を用いた隠語の生成過程と変換プロセス —Twitter『情報垢』の投稿を例に」『日本語用論学会第 22 回大会論文集』第 15 号. 113-120.
- 長谷川典子. (2004). 「インターネット掲示板のエスノグラフィー：日韓異文化コミュニケーション研究に向けて」『多文化関係学』1. 15-29.
- 藤田華奈・坂井田瑠衣(2024).「Twitter における印象管理の分析：アカウントを使い分ける絵書きを対象として」『第 100 回言語・音声理解と対話処理研究会資料』.74-78.
- 水沼友宏・菅原真紀・池内淳(2013).「大学生の Twitter における行動規範に関する分析」『情報社会学会誌』 8(1). 23-37.
- 若狭優(2018).「自己呈示の手法としての『SNS の使い分け』：状況論的自己論の視点から」『社会学雑誌』34. 113-130.
- Ahearn, L. M. (2021). *Living language: An introduction to linguistic anthropology* (3rd ed.). Oxford: Wiley-Blackwell.
- Grice, H. P. (2014). *Logic and Conversation*: Adam. J and Nikolas. C. *The Discourse Reader* (3rd ed). 62-72.
- Herring, S. C. (2007). Faceted Classification Scheme for Computer-Mediated Discourse. *Language@Internet*, 4, article 1.
- Ross, S. (2019). Being Real on Fake Instagram: Likes, Images, and Media Ideologies of Value. *Journal of Linguistic Anthropology* 29 (3): 359-374.

¹ 記載内容は研究協力者の自己申告である。

² 使用しているアカウントの名称は原則研究協力者が定義している名称を記載している。A のジャニーズ垢は、アカウント名称が固有名詞を含むため、筆者が変更したものである。D の「推し垢」は D がアカウント名に言及していないかったため、筆者が便宜的に名付けたものである。

³ ジャニーズ事務所は現在、「STARTO ENTERTAINMENT」と呼ばれているが、本稿ではより読者に身近な名称である「ジャニーズ」を使用する。